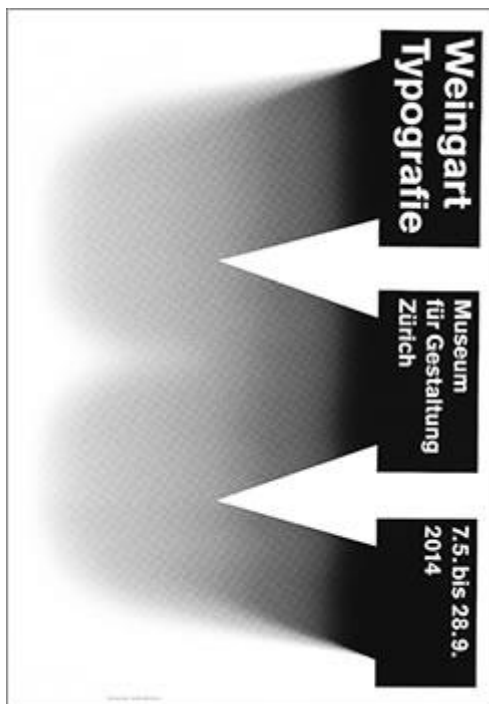


第11回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2015 審査結果 入賞作品発表

入賞作品

グランプリ



シュライフォーゲル, ラルフ(スイス/オランダ)  
ヴァインガルト・タイポグラフィー展  
A 部門

金賞



ロソハ, ヴィエスワフ(ポーランド)  
ロソハ もうひとつのエリア、もうひとつの  
フォーマット A 部門

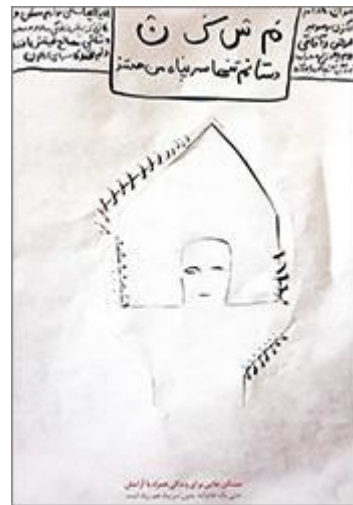


尾崎 美穂(日本)  
70 years after the war  
B②部門

銀賞



上西 祐理(日本)  
世界卓球 2015  
A 部門



ヘマト, エルハム(イラン)  
わたしの両手は唯一の隠れ家  
A 部門



アール・ツー(ポルトガル)  
何か質問は  
B②部門

銅賞



アトリエ ミット メーブリック(ドイツ)  
こちらでお買い上げありがとうございます  
(展覧会)  
A 部門



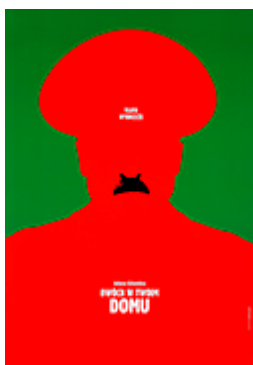
クリエンビュール, ミハエル & ヴァイス,  
イワン(スイス)  
ロックヴォッヘ ロト ファブリク チューリッヒ  
(ロックミュージック・フェスティバル)  
A 部門



奥村 靱正(日本)  
第2回「奥村祭り」 A GIFT OF JOY  
A 部門



ポメレンケ, リサ & ロト, シモン(ドイツ)  
ジムルタンハレ 2014(展覧会)  
A 部門



コルクーツ, ヴォイチェフ コレク(ポーランド)  
ウィブルゼーゼ劇場 あなたの家に二人  
A 部門



トレチャコフ, フィリップ(ロシア)  
マヤコフスキーの日(演劇)  
A 部門



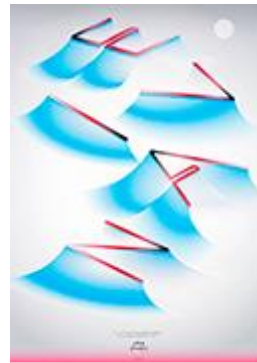
新村 則人(日本)  
無印良品キャンプ場 2015  
A 部門



ヨウ, イービン(中国)  
カレンダー 四月  
B①部門

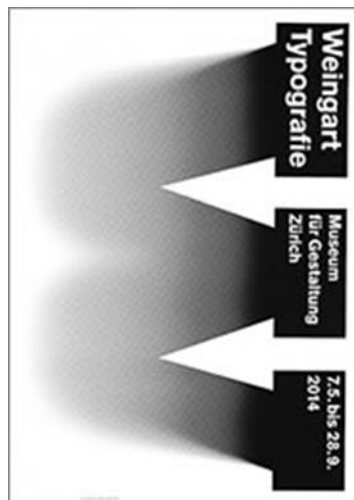


ザカール, タハ(イラン)  
イアニス・クセナキスを想って  
B②部門



黄 欣英(中国)  
エビアン  
B②部門

## 第 6 回 亀倉雄策国際賞



シュライフォーゲル, ラルフ(スイス/オランダ)  
ヴァインガルト・タイポグラフィー展  
A 部門

## IPT2015 第二次審査講評

勝井三雄（日本）(IPT2015 第一次、第二次審査員／実行委員) Mitsuo Katsui

近年、デジタル素材で審査するコンペティションが多くなったにも関わらず、世界ポスタートリエナーレトヤマでは、作品そのままを審査するという方法を維持している。その中で、参加国が 57 の国と地域に達し、応募が 3,845 点となったことは素晴らしい。

審査行程は、6 月に行われた第一次審査で、国内審査員により入選が 351 点選ばれた。次に開会直前の 9 月中旬に行われた二次審査で、国際審査員であるフィリップ・アペロワ、ジャンピン・ヘ、浅葉克己そして私勝井三雄で審査初日に全入選作品を総見してから 50 点まで絞り、その午後に、37 点、19 点と厳選していった。翌日その 19 点の中から上位賞を決定する試みとなった。

グランプリでは、図らずも第一次審査の際に国内審査員によって選ばれ、日本グラフィックデザイナー協会から授与される亀倉雄策国際賞として選ばれたラルフ・シュライフォーゲル「ヴァインガルト・タイポグラフィ展」を、国際審査員全員一致で推薦した（亀倉賞受賞者について、海外からの審査員には IPT 全受賞作決定後に公表した）。タイポグラファーとして著名な、ヴォルフガング・ヴァインガルトの頭文字「W」をテーマに、その文字の中に情報データを盛り込んだ印刷の網点を適切な表現として使い、しかも一色で作られた白黒のポスターは完成された表現として突出していた。多くの新しいイメージを発掘する為の審査に主眼を置いて、国内と海外の文化の違う審査員が同一の作品を選出することはめずらしい。

金賞の一つは、尾崎美穂「70 years after the war」。桜の花びらが舞う中に浮かんだ真っ黒いホールのような日章旗。今年戦後 70 年を迎え、その機微に触れる表現の大胆さに驚嘆した。もう一つは、ヴェイスワフ・ロソハ「もう一つのエリア、もうひとつのフォーマット」を選んだ。ロソハは秀作を毎回応募していて、IPT2009 での銀賞はじめ幾度か受賞をしているが、今回の入選作品は彼の新しい表現としてまとめられた初めてのポスターであり、その個性の上で完璧な作品として開花したことが認められた。その他に銀賞 3 点の作品が選ばれた。その 3 点の中にそれぞれ多くの特徴を持った若い作家の作品が大家とともに競演したことは収穫であった。

今回選出されたポスターは IPT2015 の展覧会で展示されているが、半分以上が町に貼られていない状況で、クリエイター一人一人が向き合う舞台としては、ネット環境の、しかも視覚的カオス状態の真っ只中で作業が行われており、ポスター媒体としての機能が当然縮小されつつある。だがしかし、デザインにとって一枚のポスターは、それが持つグラフィックイメージの原点の発掘である。つまり記憶に残るイメージを作り出す創作の原点である。この会場でアラブ、東南アジアやヨーロッパなどのあらゆる文化が一堂に会することが自分たちの創作の原点になる。それ自体が現在、未来に向けたメッセージを見いだすメディアであり、世界ポスタートリエナーレトヤマである。

## 浅葉克己（日本）(IPT2015 第一次、第二次審査員／実行委員) Katsumi Asaba

2015年の浅葉先生の売り文句は、デザイン生活60年、卓球生活40年、書道生活20年。「、」を打ってあるのは、まだまだ継続中ということの意味している。そして、テーマとしては、「デザインを血肉化する」を掲げている。

そんな中で第11回世界ポスタートリエンナーレトヤマ2015が開催された。3年に1回なので、30年は過ぎて、世界でも伝統ある輝かしい世界ポスター展へと成長を続けている。新人の登竜門であることは変わらないが、超ベテランも応募して来て、グラフィックデザイン界の層の厚さが読み取れる。

世界ではインターネットの公募展も始まっているが、トヤマはあくまで印刷物、紙媒体を続けてほしいと強く思っている。僕は一次審査には何回か参加しているが、フランスからフリリップ・アペロワ、ドイツからジャンピン・ヘ、日本から勝井三雄、浅葉克己の4人での最終審査は初めてのことだ。外国の2人とは旧知の友人であり、緊張はしたが、デザインの未来を求めている作品は共通しているので、何度も意見を交換して、それを探し当てるのは、気持のいいものであった。審査員同士の深いコミュニケーションの理解には、通訳のリサ・ソマーズさんと呉菲さんの助けを借りた。

そして、3,845点という膨大な全応募作品群が、巨大な体育館に4層にして並べられた第一次審査のことを思い出す。松永真、佐藤晃一、福島治、長嶋りかこの援護に感謝したい。そこから選ばれた入選作351点が並ぶ展示会場は、壮観であった。地球上の表現とは何かを強く感じた。

第二次審査では、受賞候補を選ぶために、1点1点の作品と1日かけて対峙した。議論は続き、賞候補作19点を選び出した。そして2日目、再び賞候補作と対峙した。その作品群が訴えかけて来るものは何か。グサッと2015年の今を表現しているものは何か、徹夜で考えた。

やはりグランプリを選出するのは難しい。入選作を選ぶ第一次審査から評価の高い、スイスのラルフ・シュライフォーゲルの「ヴァインガルト・タイポグラフィ展」のポスターが浮かび上がり、ヴァインガルトの頭文字Wと矢印の表現。矢印は未来像を強く指し示してくれた。ラルフ・シュライフォーゲルの緊張感溢れる新境地の傑作が受賞した。タイポグラフィのグランプリは初めてか。

金賞(1)は尾崎美穂の戦後70年のポスター。散った桜に黒い丸、何度見ても、思いの深い作品だ。NHKの戦後70年の特集番組、知らなかった日本の姿が桜の花びらに込められている。潜水艦イ400の存在や、沖縄戦を戦った少年たちの護衛隊が目につく。金賞(2)はポーランドのヴィエスワフ・ロソハの個展ポスター、「もうひとつのエリア、もうひとつのフォーマット」。ロソハの個展はぜひ見たいと思う。白いRと赤いR、その視点とは何であったか。銀賞(1)は、日本の上西祐理の「世界卓球2015」。写真のディレクションの新しい表現が成功している。日本卓球協会参加としても喜んでいる。銀賞(2)、ポルトガルのR2(アール・ツー)の「何か質問は」。抽象表現と言葉が共になって、音楽性を感じる作品だ。銀賞(3)、イランのヘマット・エルハムの「私の両手は唯一の隠れ家」。イランからの作品も多量にやって来たが、この作品が上位賞に入り、砂の国を思わせる表現がいつまでも心に残った。銅賞10点も、それぞれの個性が遺憾なく発揮されていた。

会場を何度もぐるぐる回って見ていると、ひとりひとりの作家が、縦棒はその国の国民性、伝統や礼儀や礼節を感じ、横棒には地球上のあらゆることを感じ、その縦棒と横棒が交わる場所から新しい創造性が溢れ出しているように感じた。

## フィリップ・アペロワ（フランス）(IPT2015 第二次審査員) Philippe Apeloig

今回富山で多くのポスターを見て、ポスター制作の世界はまだまだ元気だと知った。もちろん、商用ポスターを目にする機会はどんどん少なくなるし、ポスターの多くは、なんらかの利益団体ではなく、文化的イベント用のデザインであったり、個人制作として作られるようになっている。

しかし、私がすぐに素晴らしいと思えるのは、より落ち着いていて、離れたところから目を捉えるポスターであることに変わりはない。私自身がとくに注目するのは、タイポグラフィの質、そしてメッセージをどういう形で表現しているかである。可愛いイメージには惹かれられないが、機知に富んだ美しい構成とバランス、そして色づかいには訴えかけるものがある。

そして一見しただけで、私は、ラルフ・シュライフォーゲルがデザインしたヴァインガルトのタイポグラフィ展覧会ポスターが傑作であると分かった。なぜかといえば、そこには、ポスターの巨匠としての、そしてさらに教育者としてのヴォルフガング・ヴァインガルトの魂が込められているからである。重みのあるハーフトーン・グラデーションからは、ヴァインガルトが抱いていた印刷プロセスへの関心が思い起こされ、そこに知識の伝達という考えが表現されている。そこには動きという発想、黒から白への移動、影から光への移動という発想が形にされている。それだけではなく、ヴァインガルトが自身の作品で使用したさまざまな技術（機械によるハーフトーンスクリーン、後にはコンピュータ技術を使った）についても語られている。「W」のイニシャルがロゴマークのようにシンボルとされる。全体の構成が90度横を向いているため、ポスターを読むという行為にもひねりが加えられる。そこには、ヴォルフガング・ヴァインガルトの反アカデミズム的軌跡が映っている。

このポスターは徹底して白黒である。形と裏返しを面白く使っている。たとえば、「W」のなかには二本の白い矢印が見え、導きと指導という概念が強調されている。学生たちにタイポグラフィの基礎を学ばせ、徐々に実験的な道へ到達するよう動機付けをする、パーゼル造形学校でのヴァインガルトの教育者としての才能が反映している。このポスターは純粋なタイポグラフィが次第に真っ白な面へと拡散してゆくが、それが暗示するのは開いた扉、すなわちヴァインガルトが学生たちに自由にタイポグラフィエレメントを使わせて、自分自身を無限に広い創作の可能性のなかで表現させたということである。

ラルフ・シュライフォーゲルは、難しい課題をみごとやり遂げたが、それは若い世代の確固たる道標であるデザイナーを褒め称えるものとなった。シュライフォーゲルのデザインは、ポスターの表面を余すことなく埋め尽くす。そのデザインは、大胆かつ繊細で、タイポグラフィも完璧である。われわれ審査員は、創作するポスターすべてにおいて、自分自身に挑戦する強さと能力を備えたラルフ・シュライフォーゲルの先鋭的な現代デザインに荣誉を与えた。

金賞の二作には共通点がある。作者自身の、あるいはポスターの眼差し、あるいはその眼、見ることである。ひとつはタイポグラフィと組み合わせられた肖像。もうひとつは、空洞となった巨大な眼窩（がんか）の拡大図、または私たちの惑星かも知れない。両者とも詩的要素を備えている。こちらから見れば見つめるだけ、向こうからも私たちを見つめる、まるで鏡のように。ポスターが私たちに問いかける。一方はある展覧会を広告するために繊細なカラーパレットを使用し、もう一方は第二次世界大戦終結から70年であることを伝える、その白と黒はあたかも世界戦争の終わりを記憶するためには色彩は使い得ないとでもいうようである。そこには永遠という感覚が表現されている。両ポスターともに、見るものにある種の催眠作用をしている。

銀賞の三作は、新しいグラフィックデザインの言語表現という点で象徴的である。それぞれ異なった技術を使用しながら、それらのデザインには緊張という要素が共通している。一作は手書きの構成、もうひとつはコンピュータ生成のアンジュレーション（うねり）とタイポグラフィエレメントの組み合わせ、そしてもうひとつは純粋に幾何学的な強烈な構成である。

## ジャンピン・ヘ (ドイツ) (IPT2015 第二次審査員) Jianping He

いうまでもなく世界ポスタートリエンナーレトヤマ (IPT) は、現代のポスターコンクールのなかで屈指のデザインイベントである。すばらしい作品群を前にして、そのなかから受賞作となる幾つかを選ぶのはじつに難しい仕事だった。私はその場の作品それぞれのデザイナーの心の内をのぞき込むように考え、私自身がデザインするなかで直面して経験してきた喜び、苦悩、問題、技術などその心の内を結びつけてみようとした。優れたポスター作品というものは、観る者たちに内面的な、そして視覚的な喜びをかならず与えてくれると私は信じている。